

論文

大阪・兵庫の障害者自立生活運動の原点

定 藤 邦 子*

はじめに

第2次世界大戦後、1948年の世界人権宣言¹の採択にみられるように、障害者の基本的人権の尊重が今日の社会的課題となってきた。例えば、世界人権宣言の25条は、障害者は人間らしい生活を営む権利を有するという生存権保障に言及している。そして、日本では、1946年制定の日本国憲法25条で、健康で文化的な最低生活権の保障が規定され、国際的動向とともに障害者の基本的人権も注目されるようになった（定藤丈弘、2003：1～2）。

しかし、1971年に始まった府中療育センター闘争²は、「面会は月1回、外出・外泊は許可制で回数制限。持物、飲物類は規制され、終日パジャマを着せられている状況。そして、施設開所当初には、入所時に、死亡した場合の解剖承諾書を書くことが条件となっていた。」（立岩、1995：180）等の人権の問題や人間らしい生活とはいえない、施設の障害者の生活を明らかにした。

一方、1970年の横浜の障害児殺しの母親の減刑嘆願阻止運動から始まった神奈川を中心とする日本脳性マヒ者協会青い芝の会（以下、青い芝の会とする）の運動は、全国的に広がっていった。この運動は、関西にも波及し、特に若い障害者に衝撃と感銘を与え、1973年には大阪青い芝の会が設立され、続いて兵庫、奈良、和歌山でも設立されていった。

本稿では、関東を中心とする青い芝の会の運動が、1970年代になぜ全国的運動になったのかを大阪・兵庫の事例を通して明らかにしていきたい。1991年、全国自立生活センター協議会発足時の中心メンバーである樋口恵子（現、NPO法人スタジオIL文京代表）は、「青い芝の会（1957年誕生）が同窓会的な親睦団体から、次第に脳性マヒ者の全国的な集まりとなり、日本の自立生活を最初にひっぱってきました。」（樋口、2001：13）と述べている。青い芝の会の運動は現在の日本の自立生活運動の原点であると思われる。本稿では大阪青い芝の会の創設に至るまでの出来事に焦点を当て、この運動に関わっていった人たちの証言を参考にし、当時の障害者の置かれていた社会背景やその運動を知ることによって、青い芝の会が全国的な運動となり自立生活運動の基礎を築いていった背景を探っていききたい。

．青い芝の会の運動の台頭

1．戦後の障害者政策と青い芝の会による障害当事者運動の台頭

1949年に制定された身体障害者福祉法は「わが国初めての障害をもつ国民を対象とした法律」であり、「わが国法制史上、初めての更生（リハビリテーション）法」（丸山、1998：1）であるという意味において、障害者の人権尊重の思想と生存権保障の理念を具体化した法制の一つであるといえる。

しかし、身体障害者福祉法は、リハビリテーション対策的な位置づけで、更生可能な軽度者を対象とする更生援護に目的を限定し、職業につく能力のない障害者は法の適用から除外され、生活保護によってカバーされるというものであった。そして、収入のない者は家族扶養か生活保護法に規定される救護施設での生活を余儀なくされた。1959年の国民年金法による障害年金は障害者に対する生活保障の施策ではあったが、重度障害者に限定され、低額支給であったので、所得保障としての問題点を残すことになった（立岩、1995：167～168）。この時期の障害者政策は、軽度の障害者には経済的自立のための職業更生であり、重度障害者には収容施設の拡大政策であった。障害者

キーワード：重度障害者、自立生活運動、青い芝の会、映画「さようならCP」

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 公共領域

運動も、親の会に代表されるような関係者の運動であり、親の運動が中心となっていたので、障害当事者の意向は押さえられていた（杉本、2001：58）。そして、国の障害者政策と親たちの収容施設拡大運動の流れの中で、1972年7月の身体障害者福祉法改定によって、身体障害者療護施設をはじめとする大規模施設がつけられていき、障害者の隔離政策へとつながっていった。

このような戦後の日本の障害者政策の中では、介護の必要な重度障害者の生活形態は、依存による家族との同居や施設の生活が主であった。しかし、1970年代の脳性マヒ者の青い芝の会を起点とする自立生活運動は、障害者が施設を出て、あるいは家族から離れて、他人の介護を受けながら生活する自立生活形態を生み出した。

1957年に結成された脳性マヒ者の団体である「青い芝の会」は、仲間が集まって茶話会を行うような親睦的な団体であった³。しかし、1970年5月に、横浜の障害児を殺した母親への減刑嘆願運動に対して、神奈川青い芝の会がその減刑嘆願運動に反対する運動を展開していった頃から、障害者を抹殺していくような健全者中心の考え方に根ざす社会への問題提起や告発を行っていく団体へと変わっていった。

この減刑嘆願阻止運動以来、青い芝の会は、障害者を本来あってはならない存在と規定している社会常識こそが脳性マヒ者殺しを助長しているものであるという考えに基づいて、優生保護法改定案反対運動⁴、障害者が独立して生活できる年金制度の確立と共に、施設、養護学校による障害者隔離に反対し、障害者が地域社会の中で生きるための運動を展開していった（横田、1979：151）。

それまで、障害者、特に重度障害者の問題は、家族の中に隠蔽された問題となりがちで、障害当事者よりも家族の介護負担の問題として取上げられることが多かった。そのような中で、青い芝の会が当事者自身の声として、障害者の生命の否定と障害者に対する社会の否定的なイメージを批判して、社会に鋭い告発を行うことにより、社会の目を障害当事者に向けさせたといえる。それは障害当事者からの社会への問題提起であり、施設の否定、家族への依存の否定であった。そして、施設や家を出て、健全者の介護や支援を受けて生活する試みでもある障害者自立生活運動へと発展していった。

3. 青い芝の会の運動の広がり

1957年に東京で結成された青い芝の会は、1970年代の神奈川青い芝の会の運動を転機として、全国的な運動として展開していった。その運動の支柱となったのが青い芝の会の行動綱領である。そして、青い芝の会は行動綱領を支柱とし、映画「さようならCP⁵」の上映運動を通して、全国的な障害者運動を展開していった。

(1) 青い芝の会の行動綱領

下記の青い芝の会の行動綱領は、神奈川青い芝の会の横田弘⁶によって、起草された。

- 「1. われらは自らがCP者であることを自覚する。われらは、現代社会にあって『本来あってはならない存在』とされつつある自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならないと信じ、且つ行動する。
1. われらは強烈な自己主張を行う。われらがCP者であることを自覚したとき、そこに起こるのは自らを守ろうとする意志である。われらは強烈な自己主張こそそれをなしうる唯一の路であると信じ、且つ行動する。
1. われらは愛と正義を否定する。われらは愛と正義のもつエゴイズムを鋭く告発し、それを否定する事によって生じる人間凝視に伴う相互理解こそ真の福祉であると信じ、且つ行動する。
1. われらは問題解決の路を選ばない。われらは安易に問題の解決を図ろうとすることがいかに危険な妥協への出発であるか、身をもって知ってきた。われらは、次々と問題提起を行うことのみわれらの行いうる運動であると信じ、且つ行動する。」（横田、1979：114）

横田はこの行動綱領は、「重度CP者の解放を進めていくための旗印」であり、「1970年の重症児殺しに対する『青い芝』神奈川連合の運動を進めていく中から次第に具象化されてきたCP者の基本的テーゼである」（横田、1979：115）と述べている。当時、青い芝の会の執行部では、この行動綱領について、過激すぎて会員がついてこなくなる等の多くの批判があった（横田、1979：115）。しかし、これらの批判がかえって「4つのテーゼを既成事実化させる洗礼」ともなった。そして、この行動綱領は1973年に結成された全国青い芝の会によって提起され、大きな衝撃を与えるとともに「自立化を目差す脳性マヒ者解放運動の思想的行動原理として会員の間に定着していった」（岡村、1988：210）。

横塚晃一⁷は、「弱者救済をうたった74年春闘においても各障害者団体の統一要求項目の中に青い芝の提案した『優生保護法改定案を撤回せよ』の項目を入れ、厚生省内に座り込みを行い精神衛生課長と話し合い、厚生大臣には同法案に対するわれわれの立場、意見を述べてきた」が、このような今までの障害者運動には見られなかった自己主張のバックボーンは、青い芝の4項目の行動綱領である（横塚、1984：91）と語っている。

（2）映画「さようならCP」制作から上映運動へ

横浜の障害児殺しの母親の減刑嘆願阻止運動の行動と軌を一にして、映画「さようならCP」制作活動がすすめられた。

「障害者も人間なのだという言葉は、障害者の側からも健全者の側からもよくいわれる。果たしてそうなのだろうか。私（CP）の世界を具体的に示さない限り、今まで安直に使われてきたこの言葉—障害者も人間なのだ—という精神構造から抜け出すことは出来ない。“視られる”存在から“視る”存在への視点の逆転を試みた」（横塚、1984：132）

この映画は、神奈川青い芝の会会員の横田弘を主演にし、横塚晃一を準主演にして、制作された。横塚は、街の中で、CP者の方からカメラを向け写真を撮ることによって、視点の逆転ができると考えた。そして、彼が写真を撮るという行為を原一男監督⁸が16ミリカメラで撮るという手法で映画が作られていった（横塚、1984：46）。それは、「重度の脳性マヒ者が街頭で、いぶかしげにこちらを見る人々にカメラを向け、あるいは横断歩道や地下街、電車の中をいざりながら移動していく姿をそのまま捉えた」（杉本、2001：82）ドキュメンタリー映画であった。

当時、神奈川青い芝の会役員の小山正義は、「横田君が地下鉄に車いすなしで乗っけてもらうところがあるんだよ。みんな横田君が1人で手を出して呼びかけても、誰も手をふり切って通り過ぎてしまう」という映画の場面に、健全者は本来、障害者を入れないという現実を感じたと語っている（小山、1981：108）

1972年3月、映画が完成し、「青い芝」神奈川連合会は、「優生保護法改定案」が国会に提出された事を新聞が報じたと同時に映画「さようならCP」の上映運動を展開していった（横田、1979：67）。上映運動は、まず神奈川から関東を中心に始められた。「それは従来の上映会としてではなく、障害者問題の討論会⁹とセットにして開かれ、大先輩の誰かが必ず参加するという形をとっていた」¹⁰。上映会について、小山は、「各大学で上映運動をやった。2年か3年かけて各地でやったけれども、ほとんど大成功だった」と各大学ではいつもほぼ100人の参加があった（小山、1981：109）ことをあげ、反響の大きさを語っている。その後、上映会は関西や九州で行われ、上映運動は全国に広がっていった。

名古屋上映会¹¹では、人間の解放とは何か、及び、自己の解放とは何かが議論された。横塚は、「この映画は、私たちの中にある健全者幻想との闘いであり、自分との闘いである」「健全者とCP者との違いは肉体にあり、その違いによって抑圧を受ける。自分の身体を自分のものとして認めていないことが、自分への抑圧としてかえってくる。障害者が自分のからだを自分のものとして認めることによってこそ障害者解放がなされ、自己への解放にもつながる」と意見を述べる。参加者からは、「施設は収容するところであり、入所者は管理され多くの自由が剥奪されている」「食欲だけの満足感以上のものを与えるような施設にすべきである」との施設の問題点が指摘された。横塚は「施設は人を管理するところで、与えてくれるところではない。満足感を与えてもらうものではなく、闘うことによって獲得していくものである」と答える。健全者と障害者との関係で、「施設の職員は手で食事していた子どもをはしで食事できるように、障害者が健全者に近づいていけるような可能性を見つけ出す援助をしていくことが必要である」という参加者の意見があった。横塚は「障害者の可能性を見いだすことは健全者に近づくことではなく、障害者には健全者に見えない独特の世界があり、その可能性を伸ばしていくことこそ必要である」と反論する。

東海地方のCP者は親兄弟に依存しており、生活保護を受けている人が少ないという現状の中で、この映画の上映を主体的にやっていくには親兄弟の反対があり、困難であるという映画上映に反対する意見があった。横塚は、「親のそばにいれば、その大きな陰にいて障害者は抹殺されてしまう。親のもとから逃げて勝手に結婚する—そういったことを親につきつけていかなければ障害者の主体性は守れないし、獲得できない」「生活保護をとることは世間体が悪いと気にする親があっても、それは当たり前なんだということをつきつけて自分自身でとっていかなければならない。誰かにやってもらったり、やってもらうのを期待して待つのではなく、個人でやろうとしなければなら

い」と答える。

東海地区上映委員会は、第3回「さようならCP」上映会終了後、この映画は今後も上映を続けていく意義を持ち合わせているという判断から、第3次上映委員会を新たに結成し、この映画のつきつけた問題提起を受け、どう立ち向かっていくのかという実質的な話し合いをしながら、主体的に上映を行っていくことを決めた¹²。

九州上映会では、青い芝の行動綱領の「愛と正義を否定する」について、納得できないあるいは理解できないという意見があり議論された。横塚は、障害児殺しの場合、すべてそれは親の愛、すなわち子供にとって生きているより死んだ方が幸せだという一方的な判断がなされる。また、愛によってつくられた施設は障害者を圧迫することになるなどのように、愛によって障害者は抑圧され、人権が認められない場合が多いと説明する（横塚、1984：142～143）。積極的に外に出ているという養護学校生（脳性マヒ障害者）から、「街は車イスで歩くには、障害が多すぎる現実の社会を考えると、子どもを外に出しながら親の愛を否定できないし、この映画や青い芝の会の考えは夢のようである」（横塚、1984：139）という意見も出たように、参加者にとって、ありのままの障害者の姿や訴えは衝撃であった。しかし、九州上映会では、青い芝の会の問題提起を含め、参加者のそれぞれの抱える障害者問題をも議論し、考える機会となった。若い参加者の中には、福岡での車イスで「街に出よう運動」やバスの乗車拒否に抗議する障害者の運動に関わっていく者もあった（中山、2001：372）。

表1．名古屋・東海地区「さようならCP」上映状況（1972年）

月日	開催会場	講師他	参加総数
6月4日	日本福祉大学	FIWC（=Friends International Work Camps）東海メンバー、小林（疾走プロ）横塚（青い芝）	60名
6月11日	名古屋大学	「さようならCP」上映委員会メンバー、原・小林（疾走プロ）小山・矢田（青い芝）	70名
7月30日	愛知県勤労会館	「さようならCP」上映委員会メンバー、横塚（青い芝）	130名

「さようならCP」上映委員会パンフレット2号（名古屋）（1972年8月8日）から作成

表2．「さようならCP」九州上映会における主な議論

上映会場	講師（青い芝）	主な議論の内容
長崎大学	小山正義 横塚晃一	「愛と正義を否定する」は、理解出来ないという意見に、横塚は、障害者は愛という言葉で抑圧されていると答える。
九州リハビリテーション大学	小山正義	すべて健全者にあわせようというのが今のリハビリテーションであるという小山の問題提起に、学生は障害者の社会復帰は前提であり、障害者が社会的存在ではないという現実があるから、社会復帰の仲立ちとしてリハビリテーションがあると反論する。
福岡県社会保育短期大学	横塚晃一	善意でやっている人が障害者を押さえている面とは、の質問。横塚は、障害児者の専門家は、善意で障害者を授産所で労働させている。それは、働いている障害者と働けない障害者の分断を招くことや障害者の労働賃金は格段に安いので、社会的にみると、一般の労働者の賃金を安く押さえる役割をすることにもなるとの例で説明する。
八女上映会	小山正義	「施設は入所者の自由意志を反映していないのではないか」「施設が社会から隔離されているので、中の問題は外には知られていないし、家族は疎遠になるケースが多い」という施設職員からの問題提起。施設は園長の力が大きい、労働者が実権を握って待遇が改善されれば、園生にも自由を認めていく意識が目覚めてくるのではないかと等意見がでる。
北九州大学	小山正義 横塚晃一	ポリオの障害者から、「我らは強烈な自己主張を行う」に関連して、どんな具体的な行動を行っているかとの質問から始まり、生活保護、障害年金や優生保護法の問題にまで議論が及ぶ。

『「さようならCP」上映論集』（横塚、1984：133～176）から作成。

・関西における障害当事者運動 —1970年代初めの青い芝の会の台頭を中心に—

1. 関西における映画「さようならCP」上映運動（背景）

関西では映画「さようならCP」の上映運動は1972年7月から始まり、その上映会に集まった障害者や健全者に大きなインパクトを与えていった。

「関西における青い芝の運動とか、いわゆる障害者の解放と自立の運動については『さようならCP』という映画が関西で上映されていったところから始まったと思うんです。」

1979年に障害者問題総合誌『そよ風のように街に出よう』を発刊、現在も編集長を続ける河野秀忠¹³はこのように記している。1960年代前半までの障害者運動は障害別の障害者団体が慈善的・慈恵的枠内で、既得権の分配を行政に求めていくような形で進められ、解放運動と呼びうるものは存在しなかった（八木、1982：48～49）。河野は1960年代、1970年代の日本の政治構造を揺り動かす様々な反体制運動の中で、関西における障害者解放運動は「さようならCP」上映運動を端緒としてはじまり、障害者も自ら生きているさまを晒すことによる問題提起をして、人間として障害者はどうあるべきなのか、そのためにどのように闘っていくべきなのかを生み出していった（河野・三矢、1978a：12）と記している。

関西ではそれまでに、「障害者解放の会」や「障害者の闘いを支援する会」などが地域にあり、障害者解放運動は各大学における入試要項の中の障害者に対する差別入試をどのように変えていくのか、また、神戸大学における「山口君の聴講を勝ち取る会¹⁴」というような形で点的に展開されていた。そのような中で、「さようならCP」の上映運動は関西に点在していた障害者解放運動を一堂に集めて、障害者運動を展開していく転機ともなった（河野・三矢、1978a：12）。

1972年に、神奈川青い芝の会から、全関西で「さようならCP」上映実行委員会を組んで、上映運動をしてほしいという要請があった。河野は1971年に、ポリオの障害者と2人で「障害者解放の会」と「障害者の闘いを支援する会」を作って、障害者問題に取り組んでいた。しかし、当時は障害者を街で見ることも少なく、どこに障害者がいるのかを探し出すのも難しい状況で、障害者の仲間づくりは進まなかった。そんな中で、「さようならCP」上映運動によって障害者が集まるのではないかという期待をもったという。第1回の会合が大阪学芸大学（現大阪教育大学）天王寺学舎で行われた。会合には大阪学芸大学や神戸大学で障害者の聴講運動を行っていた学生組織や障害者問題に関心をもっていた社会人が集まった。

映画上映に関しては、映画「さようならCP」を上映することが現在の障害者運動にとってどのような意味があるのか、すなわち、障害者解放運動の中での「さようならCP」の位置づけを確立してから上映運動をすべきであるという意見や、障害者に対する差別の重みを考えると障害者自身の生き様を問題提起する映画を安易に上映するのは問題ではないか等の意見が特に学生の間から提起された。しかし、障害者の実態を十分に把握していない現状にあっては、『さようならCP』の上映を、その位置づけをどのようにしていくか、ではなしに上映運動の中からどれだけ障害者を結集できるのか、そして障害者解放運動と自立の層をどれだけ厚くしていけるのが先決である、「上映する中から障害者の実態に触れ合って、その中から障害者の自立と解放の運動をくみ上げていこう」という考えに立ち、1972年7月15日、関西上映実行委員会ができ、上映運動が開始された（河野・三矢、1978a：13）。

2. 「さようならCP」上映運動（開始、実践、広がり）

関西の上映運動をすすめるに際して、神奈川青い芝の会から横塚晃一が派遣された。横塚と上映運動を続けた河野は次のように当時の様子を記している。

「横塚さんはテキパキ指示を出し、もちろん暇さえあれば各種の集会や街頭でのピラマキ、定期的に各団体に呼びかけを行っていた試写会がジワリジワリと奏功したこともあって、上映会の申し込みを獲得させた。横塚さん自身自ら既存の障害者団体に電話をかけては頭を下げられていた。」「横塚さんの叱咤激励、横塚さん自身のセールスでポツポツと上映会を引き受けてくれるところが現われ、少しずつだけ上映実行委員会は忙しくなってきた。」¹⁵

関西上映に向けて疾走プロダクションは次のような映画の解説をしている。CPと私たちとの具体的な関わりを映

画という場の中で追求していくために、この映画は作られた。「映画の主人公はCP者（＝脳性マヒ者）である。主人公の1人はあってはならない存在と規定された自己の肉体を晒しつづける。もう1人の主人公は今まで抑圧してきたこの世にカメラを向け、とり続ける。その核として、私たちは障害者対健全者という問題の設定の仕方にこだわる。」この設問の中に、私たちはお互いに差別しあう構造をつくり出す権力の意志を見だし、この設問を破壊するためにお互いを映画＝場の中で追求していく¹⁶。結局、主人公は、社会参加できるのではないかという健全者幻想が障害者を疎外する街の中で壊れていくのを感じながら、障害者のありのままの姿をさらすことによって健全者中心の社会への抵抗を生み出していったのである。

関西上映実行委員会は、「障害者は1人の人間としての当然の権利である教育や生活や職業を奪われており、それは強化されている。例えば、1974年実施予定の養護学校義務化は障害者を普通教育から締め出し、より一層選別するものである。」と健全者社会から切捨てられてきた障害者の現実を訴えて、上映運動によって障害者と健全者が共同して障害者解放を進めていこうと次のように呼びかけている。「私たちは府中療育闘争を先頭に施設で闘う障害者、養護学校義務化と闘う教育実践者の人々、大学・職場で差別と闘う障害者、福祉会に集う障害者との闘いの回路を『さようならCP』上映運動の中で見つけ出し、個々の上映実行委員に参加する団体と共同し、支配-差別の観を打ち砕き、障害者解放ー人間の未来に向かって今その一步を踏み出そう」¹⁷

関西上映実行委員会は、上映運動を通じて、障害者解放に向けた運動を積極的に担っていこうとする山口君の聴講を支援する会や筋ジストロフィーの人たちの団体等と接触することによって、彼らがイメージしてきた障害者解放を彼ら自身の意識として定着させることができた。障害者解放のイメージとは、府中療育センター闘争、八木下学習権闘争¹⁸、青い芝の会等で障害者の言葉、文化、行為の自立を獲得した障害者の姿である。関西上映実行委員会は1972年9月末で解散した。上映運動は障害者解放運動の一端でしかないが、障害者解放の闘いは障害者の自立過程における闘いであるべきであり、映画「さようならCP」は健常者中心の社会に対して視点の变革を促す映画としてより一層の上映運動を拡大していくべきであるという方向性が示された。上映運動は、1972年11月に上映事務局に引き継がれ、1973年11月まで続けられた¹⁹。

3. 「さようならCP」上映運動に関わっていった人たち

関西青い芝の会初代会長（1974年～78年）の古井正代は、偶然、大阪駅で「『さようならCP』上映実行委員会」のチラシをみて事務所まで行った。それが「青い芝」の運動との出会いだった（古井、2001：365）。そして、それ以後、関西青い芝の会の運動において中心的な役割を果たしていった。

「養護学校のなかでは、『○○できない人はアカン』とか『健全者を見習え』とか、『障害者は生きとったらあかん』とか、直接的にも間接的にもそんなことを教えつけられて育ってきた。それが、『青い芝』の運動に出会うことで、『障害者で何が悪い』という言葉を知った。その一言はそれまでの考えと180度違う考え方だった」（古井、2001：365）。

上映活動は資金的にも人材的にも貧困な中で1年半ほど続き、その中で古井正代の提案で、彼女の卒業した兵庫県立書写養護学校の同窓生の集まりをもった。その集まりに参加した障害者10名と上映実行委員会の10名が毎週日曜日に姫路市で集まった。最初は養護学校の先生や親に気兼ねして、茶話会のようなものであった。しかし、次第に障害者として自分たちはどう生きるべきなのかが話題になっていった。障害者も人間なのだから、みんながやっているようなことをやろうではないか。映画「さようならCP」に触発されたこともあり、障害者の集まりで映画を作ろうということになり、1973年1月に映画「カニは横に歩く²⁰」の制作開始となる（河野・三矢、1978a：14）。映画に出演した澤田隆司（重度の脳性マヒ障害者、1946年兵庫県生れ）は、当時のことを次のように語っている。「映画『カニは横に歩く』に出る。見せてやる、見せてやる。そういう気持ちでいた。わが家を出るきっかけの一つでした。仲間づくりの一つとおだてられて出た²¹」

「カニは横に歩く」の制作に先だって、「1972年12月に姫路自立障害者集団『グループ・リボン』の結成の集いが書写養護学校同窓会館で開かれた。この団体が後に兵庫県グループ・リボンになり、関西のグループ・リボン連合会に成長し、1974年11月に結成する関西青い芝の会連合」につながっていった（河野、2005：234）。

1973年、松井義孝（脳性マヒ障害者、1951年生れ）は、知り合いに誘われて、『さようならCP』上映実行委員会の

事務所を訪れた。その頃はちょうど『カニは横に歩く』の制作が開始された時期であり、その映画の制作過程に関わっていくことになる。

「映画は姫路で撮影されましたが、姫路まで大阪から週1～2回通って行きました。撮影にはほぼ1年間かかりました。障害者と介護者を含めて、20歳から25歳ぐらいまでで、みんな若かったです。また、介護者は学生が多かったです。」²²

松井は、8歳から9年間の施設生活の後に、高校へ行くために施設を出て、自宅から堺養護学校高等部に通い卒業した。彼は脳性マヒの障害で、言語障害もきつく、施設でも、養護学校でも差別を感じていた。施設では、8人部屋で生活していたが、いつも誰かにいじめられていた記憶があるという。「脳性マヒ者は言語障害がある。何をやらせてもおそく、かっこ悪い存在であるものに対して、集中攻撃をやることで施設の中の不満を解消していたようである」と記している。彼は大人になって施設を出れば、健全者の立場と同じ立場にたつことが出来るのではないかと考えていた。しかし外に出てやはり脳性マヒ者は健全者や他の障害者から差別される存在であると感じていた（松井、1981：8～10）。高校卒業後、在宅生活以外には他に行くところがなかった。知り合いに勧められて『さようならCP』の上映実行委員会の事務所に行ってみて、「ここやと感じた」。「僕と同じCPの人達がたくさんいたので、ここでなら自分も役にたてる」と感じ、青い芝の会の中で活動することを決意する。そして、「カニは横に歩く」の制作活動参加に始まり、73年3月からの大阪青い芝の会準備会と同年4月の大阪青い芝の会結成にも中心的に関わっていった²³。

「さようならCP」上映集会に参加した人達は、それぞれの立場で障害者問題や運動について考えていった。「釜が崎医療を考える会」のメンバーの1人は、かつて障害者問題に取り組んでいたころ、ただ「かわいそうな人たちに」と善意の押し売りをしている自分が嫌になって障害者問題から離れていった。しかし、「さようならCP」上映集会に参加し、八木下浩一の「“障害者運動”を面白半分で作ってほしくない、自分本位のことばかり考えながら残りの一部で障害者を見世物的に、障害者運動をやってほしくないという」言葉の中にそれまで持ち続けていた自己嫌悪を解決する糸口を見出せる気がした。釜が崎の中でも障害者問題との共通点を見出し、なぜ自分は釜が崎の中で運動をやるのか、どういう視点に立ってやるのかを新たに再確認しようとした。そして、みんなで、悩みや苦しみを共有できる場として内部通信を発行していった²⁴。

4. 「さようならCP」上映運動の果たした役割と運動の広がり

「さようならCP」関西上映運動は、「位置づけ」よりも「実践」に重きをおくという考えで、さまざまな個人や団体に上映を呼びかけ、それらの人々に依拠した形で上映会をもち運動を発展させていった。その中で、「グループ・リボン」という大きな成果を生み出し、それ以後具体的成果として、介護者集団「グループ・ゴリラ²⁵」や「青い芝の会」につながっていった²⁶。そして、それらのつながりの基礎は、上映運動開始の3ヶ月の短期間に作られていった。

河野は、横塚が「障害者の考え方がゆがんでいると言われているが、これだけ差別を受けていればゆがむのは当然である」「障害者自身の声で権利を主張し、自己主張しなければならない」と、若い障害者に話しているのを聞き、すばらしいと思った。そして、彼は「障害者はそれまで疑問に思っていたこと、その時代の中でできないと思っていたことがあったが、そこに横塚さんというリーダーが現れて、映画という非常に伝わりやすい媒介を得て、関西では運動が展開されていった」²⁷と語っている。当時は大学の講堂や公民館で映画をやるというと人が集まる時代でもあり、それらの条件のもとで、青い芝の会の運動が特に若い障害者や健全者に感銘を与えることにより、短期間の間に飛躍的な発展をとげた。

「カニは横に歩く」の製作はマスコミに取り上げられ²⁸、反響を呼んだこともあり、在宅障害者の急激な結集をもたらした。そのような盛り上がりの中で、自立障害者集団グループ・リボンと介護者集団であるグループ・ゴリラの組織化ができたことにより、1973年1月からは仲間作りのための在宅重度障害者訪問活動「こんにちは訪問」²⁹が精力的に行われていった。そして、同年4月29日、大阪青い芝の会が結成された。

表3．関西における「さようならCP」上映状況（1972年8月～9月）

月日	上映会場	主催者他
8月19日	北大阪上映集会（東淀川勤労者センター）	関西上映実行委員会 講師は八木下浩一
8月20日	東神戸上映集会（神戸学生センター）	関西上映実行委員会
9月5日	滋賀県第二びわこ学園	びわこ学園有志
9月9日	西神戸上映集会（神戸勤労会館）	関西上映実行委員会
9月10日	南大阪上映集会（阿倍野YMCA）	関西上映実行委員会
9月13日	大阪教育大学（大阪池田市）	大阪学芸大学障害者解放研究会
9月15日	大阪青少年センター	筋ジストロフィーの人々を守る会
9月17日	討論集会（東淀川勤労者センター）	関西上映実行委員会、講師は横塚晃一
9月20日	神戸大学	山口君の聴講をかちとる会、神戸大生協
9月26・27日	大東市市民会館	大東市障害児の学習権を守る教師の会
9月29日	西宮勤労会館	関西上映実行委員会

「さようならCP」上映ニュース（1972年9月16日）から作成

おわりに

1960年代初めに、アメリカにおいて重度の身体障害者を中心に展開された自立生活運動は、経済的職業的自活や身辺自立とは異なる自立観を構築した。介護者のケアを受けて、自らの人生や生活のあり方を自らの責任において決定し、また自らが望む生活目標や生活様式を選択して生きる行為を自立とする考え方である（定藤丈弘、1993：8）。

一方、日本において、1970年から始まった神奈川を中心とする脳性マヒ者の団体である青い芝の会の運動は、障害者の生命の否定と障害者に対する社会的イメージを批判する障害当事者からの問題提起であり、それは障害者の解放と自立を追求していった日本独自の障害者の自立生活運動につながっていった。

関西において、1972年から始まった「さようならCP」上映運動を通じて、青い芝の会の運動に共感していった障害者達は、自ら運動の先導者となっていった。そして、大阪青い芝の会を設立していった。1975年には、金満里（重度のポリオ障害者）が大阪で初めて生活保護をとって、介護を受けながら自立生活を始めた。それ以後、大阪において、重度の自立障害者は増えていった。青い芝の会の運動は経済的自立や身辺自立の困難な障害者が介護を受けながら、障害者主体の自立を可能にしたといえる。青い芝の会の運動は、その行動綱領という理念をもち、「さようならCP」上映運動を通して全国的な運動となっていった。関西においても、「さようならCP」の上映運動を端緒に障害者の結集、組織づくりが進み、障害者自身が主張し運動をすすめていった。その意味において、ここでとりあげた、「さようならCP」上映運動から始まった運動が関西における障害者自立生活運動の原点であるといえる。

樋口は青い芝の会の運動について、「日本では障害者の中でも過激で行動的な集団というレッテルが貼られ、仲間としてみられることは迷惑といった思いをもった障害者も多く、他の障害者からは相容れにくく、脳性マヒ者だけの運動として展開していったのです。」（樋口、2001：15）と述べるとともに、「日本の、とくに全身性障害で言語障害を併せもつ人達がおかれてきた状況はあまりにすさまじく、“障害者だから仲間”と思えるような土壌はできていなかったし、妥協を許すことは自分たち自身の存在が危ぶまれるといった危機感をもっていたのだといえます」（樋口、2001：14）と、重度障害者、特に脳性マヒ者の置かれていた当時の状況の厳しさを語っている。その状況の中から起こってきた言語障害をもつ脳性マヒ者を中心とした自立生活運動は日本独自の特徴をもつものであった。

本稿では、「さようならCP」の上映運動を追い、運動の創成期に起こったことを記した。大阪青い芝の会の結成やその活動の展開については、定藤（2005）後の調査の成果も加え別途報告する。

(注)

- 1 世界人権宣言(第25条)については、手塚直樹(1997:6)を参照。
- 2 1968年4月に開設された東京都府中療育センターは、重度の身体障害者、知的障害児・者、重症心身障害者を対象とする定員400名の大規模施設であった。都は1970年12月に在所者のうち重度の身体障害者、知的障害児・者を市街から遠く離れた施設(多摩更生園)に移転することを在所者の意向を無視して計画した。この施設移転に反対して、1972年9月から都庁前でテントを張って、3年半に及び座り込み闘争が起こる。移転の反対理由は、障害の重度と軽度による分類収容、施設の移転先が市街地から遠く離れていること、施設の民間委託による処遇の劣化の予測などがあげられる(立岩、1995:179~181)。府中療育センター闘争については、闘争の中心としての役割を担った2人の女性障害者に焦点をあて運動の経緯とケア(介護)の質の問題点に触れた岡田英巳子(2003)の論文がある。
- 3 青い芝の会は東京都立光明養護学校卒業生の金沢英児、山北厚、高山久子の3人によって結成された。彼らは「盲人や聾啞者はたがいに励まし合う独自の会を持っているのに、なぜ脳性麻痺者だけはそれを持ってないのか」という脳性マヒ者のまとまりのなさに憤りを感じ、会を結成した(岡村、1988:67~80)。1960年代の青い芝の会の運動については、鈴木雅子が高度成長期の新しい障害者運動として、青い芝の会を「運動の経過」、「運動の思想」、「運動の構造」の3側面から実証的に分析しており、参考になる(鈴木、2003)。
- 4 1972年5月26日、政府は優生保護法改定案を国会に提出した。「青い芝」神奈川連合会は改定案の中の14条の4「その胎児が重度の精神または身体の障害の原因となる疾病または欠陥を有する恐れが著しいと認められるもの」に対して人工妊娠中絶を認める、という条項は障害者の生存権を否定しようとするものとして断じて許容することはできないという理由で、14条4を削除する事を要求する請願書を参議院に提出した。その後、優生保護法改定案反対運動は全国の青い芝の会の運動として展開され、結局、優生保護法改定案は参議院で廃案になった(横田、1979:67~68、87~89)。
- 5 CPはCerebral Palsyの頭文字で脳性マヒと訳される。
- 6 1933年横浜生まれ。不就学。著書には横田(1975a)(1975b)(1979)(1985) 対談集には横田(2005)がある。
- 7 1935年埼玉県生まれ。青い芝全国連合会会長、全国障害者解放運動連絡会議(全障連)代表幹事等も務めた。1978年に癌で逝去。著書に横塚(1975)、その増補版として死後発行された横塚(1984)がある。
- 8 原一男は「ゆきゆきて、神軍」(1987年、日本映画監督協会新人賞、ベルリン映画際カリガリ賞、パリ国際ドキュメンタリー映画祭グランプリ)などで知られる映画監督。「さようならCP」は原が監督した最初の作品で、同じ1974年には第2作「極私的エロス・恋歌1974」も発表されている。
- 9 討論の様子については、横塚(1984:133~188)に記録が収められている。
- 10 河野秀忠「私的『障害者解放運動』放浪史」豊能障害者労働センター機関誌『積み木』88号を参照。
- 11 「さようならCP」名古屋上映会討論の内容は、「さようならCP映画討論報告(1972年7月30日)」「『さようならCP』上映委員会パンフレット』2号(1972年8月8日) 2-8頁を参照。
- 12 『「さようならCP」上映委員会パンフレット』2号、9頁。
- 13 1942年大阪生まれ。1972年「さようならCP」上映運動に最初から関わり、中心的役割を担う。その後、関西の青い芝の会の運動を健全者の立場で支援してきた。
- 14 神戸市立友生養護学校を卒業した重度脳性マヒ者の山口高秀は、1970年1月24日、「もっともっと勉強して大学で生物学を学んで、脳の研究をしたい。そして、僕らみたいなCPの子供をなくしたい」と、神戸大学教養部に聴講を願い出たが、4月に「君のような見てくれの悪い者がいると他の学生の気が散って勉強できなくなる」などの差別発言を受け、聴講の願いは拒否された。山口の姉は教養部長に身代わり聴講を勧められ、半年後の10月から身代わり聴講し、自宅で山口と共にテープとノートで学習した。しかし、山口は自らが講義に出席し、聴講することを希望し続けた。1972年5月に神戸大学教養部で「山口君の聴講をかちとる会」が結成され、市民の間でも「山口高秀君の聴講を支持する市民の会」が結成された。1000名を超える神戸大生の署名と1000名に近い市民の署名が集まり、1972年10月、山口は神戸大学教養部数学科の聴講を許可された。
- 15 河野秀忠「私的『障害者解放運動』放浪史」豊能障害者労働センター『積み木』88、91号を参照。
- 16 「さようならCP」関西上映実行委員会アピール(1972年8月30日)資料を参照。
- 17 同上資料を参照。
- 18 1967年、八木下浩一(当時26才)は、地域の小学校への就学運動を始めた。その運動により1970年、埼玉県川口市立芝小学校に29才で初めて学籍を獲得し就学した。
- 19 大阪人権センター所蔵の次の資料を参照。「1972年10.2 理論合宿基調」(「さようならCP」関西上映事務局)、『さようならCP』上映運動の第3期総括(関西上映事務局解散再出発委員会、1973年)。なお、1973年11月の「さようならCP」上映事務局解散後、その事務局は障害者問題資料センターりぼん社に引き継がれていった。りぼん社は様々な闘う人々、団体との意見・情報交換の必要性に基づき、障害者の自立組織や障害者の生の声を収集し、出版することによって一般に広めることを目的として設立された。
- 20 1972年、『カニは横に歩く』制作実行委員会、モノクロ・1時間10分。『何色の世界』(1975年障害者問題資料センターりぼん社 カラー

- ー・1 時間12分)、『ふたつの地平線』(1977年障害者問題資料センターりぼん社カラー・1 時間22分)とともにビデオ化され発売されている (<http://www.hi-ho.ne.jp/soyokaze/video.htm>)。その広告には、「青い芝の会関西連合会が結成されるはるか以前、閉ざされた日常との決別を目前にして、重度脳性マヒ者たちが街に身体をさらし、ことばを放つ。関西における障害者解放運動の先駆をなした群像の記録。」と記されている。また「カニは横に歩くメモリー」という河野の文章も記されている。 (<http://www.hi-ho.ne.jp/soyokaze/kaniyoko.htm>)
- 21 大阪人権博物館内展示の映画「カニは横に歩く」の説明文を参照。
- 22 松井義孝へのインタビューより。
- 23 松井義孝へのインタビューより。
- 24 『医療を考える内部通信』第0号(1972年8月21日)を参照。
- 25 介護者集団であるグループ・ゴリラについては、山下幸子の論文に詳しい。山下は1970年代初めのグループ・ゴリラの創成期の思想と実践について考察している(山下、2004)。また、1977年から1978年の介護問題を含む大阪青い芝の会の混乱期における青い芝(脳性マヒ者)とゴリラ(健全者)の関係性を論じている(山下、2005)。
- 26 前掲『『さようならCP』上映運動第3期総括』資料より
- 27 河野秀忠へのインタビューより。
- 28 河野秀忠・三矢博司(1978a)15頁。『カニは横に歩く』については、73年1月31日付けの毎日新聞に「“身障差別”の実態、映画で告発」の見出しで、また、73年2月8日付けのスポーツニッポンに「関西の脳性マヒ者が映画作り『カニは横に歩く』- 自立精神に燃えるグループ・リボン - 」の見出しで紹介された記事がある。
- 29 「こんにち訪問」は、在宅重度障害者を訪問し、会合などに参加してもらい、一緒に活動を行っていかうという、仲間づくりと組織づくりを目的としていたが、家に閉じこもりがちな重度障害者にとっては、外出し、社会参加し、視野を広める機会となった。同時に障害者の実態を知る機会ともなった。こんにち訪問によって、青い芝の会の運動に関わっていった人達は介護の必要な重度障害者が多かったが、その中から運動の中心的な役割を果たしていく障害者もあった。

参考文献

- ・大阪人権博物館編(2002)『障害者でええやんか! 変革のときー新しい自立観の創造を』大阪人権博物館
- ・大阪人権博物館編(2003)『聞き書き障害者の意識と生活』大阪人権博物館
- ・岡田英己子(2002)「戦後東京の重度障害者政策と障害者権利運動に見る女性の役割(1)ー身体障害者療護施設の設立経緯を通してー」『人文学報』No.329(2002年3月) 東京都立大学人文学部
- ・岡村青(1988)『脳性マヒ者と生きる 大仏空の生涯』三一書房
- ・金満里(1996)『生きることのはじまり』筑摩書房
- ・河野秀忠・三矢博司(1978a)「関西における障害者解放運動の“前史”」障害者解放新聞編集委員会『がしんたれ』創刊号(1978年8月5日) りぼん社
- ・河野秀忠・三矢博司(1978b)「関西における障害者解放運動の“前史”」障害者解放新聞編集委員会『がしんたれ』No.2(1978年9月5日) りぼん社、
- ・河野秀忠「私的『障害者解放運動』放浪史」豊能障害者労働センター機関誌『積み木』88号、89号、91号、96号 (<http://www.tumiki.com/es/eskawano.html>より)
- ・河野秀忠(1999)『『ゆっくり』の叛乱』日本放送出版協会
- ・河野秀忠(2005)「研究ノートの覚書のようなもの「私的、今は昔のメモリー」(その2)ー障害者市民、かく闘えり!ー」『人権教育研究』第13号(2005年3月) 花園大学人権教育センター
- ・河野秀忠(2005)「障害者運動の「伴走者」として」『Volo(ウオロ)』No.407(2005年7・8月号) 大阪ボランティア協会
- ・小山正義(1981)『いきざまーある脳性マヒ者の半生ー』JCA出版
- ・定藤邦子(2005)「大阪・兵庫の障害者運動ー1970年から1980年代ー」立命館大学大学院先端総合学術研究科博士予備論文
- ・定藤丈弘(1993)「障害者の基本思想としての自立生活理念」岡本栄一、定藤丈弘、北野誠一編『自立生活の思想と展望』ミネルヴァ書房
- ・定藤丈弘(2003)「障害者福祉の基本的思想」佐藤久夫・北野誠一・定藤丈弘編『現代の障害者福祉 改訂版』有斐閣
- ・杉本章(2001)『障害者はどう生きてきたかー戦前戦後障害者運動史ー』ノーマライゼーションプランニング
- ・鈴木雅子(2003)「高度経済成長期における脳性マヒ者運動の展開ー日本脳性マヒ者協会「青い芝の会」をめぐるー」歴史学研究会編『歴史学研究』No.778(2003年8月) 青木書店
- ・立岩真也(1995)「はやく・ゆっくりー自立生活運動の生成と展開」安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法 増補改訂版』

藤原書店

- ・立岩真也（1998）「1970年」『現代思想』Vol.26-2（1998年2月）→立岩真也（2000）『弱くある自由へー自己決定・介護・生死の技術』青土社（pp.87-118）に収録。
- ・立岩真也（1999）「自己決定する自立 - なにより、でないが、とても、大切なもの」石川准・長瀬修編『障害学への招待』明石書店
- ・手塚直樹（1997）『社会福祉選書 障害者福祉論 第4版』光生館
- ・中山義人（2001）「僕自身が考えて、運動を組み立ててきたこの28年」全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化』現代書館
- ・樋口恵子（2001）「日本の自立生活運動史」全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化』現代書館
- ・古井正代（2001）「CPとして生きるっておもしろい」全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化』現代書館
- ・松井義孝（1981）「障害者の生活史ー松井義孝氏（28）の場合ー」三者合同機関紙局（大阪青い芝の会・グループ・ゴリラ・りぼん社）編『飛翔』No.27（1981年6月10日）
- ・丸山一郎（1998）『障害者施策の発展ー身体障害者福祉法の半世紀ー』中央法規
- ・森修（2000）『ズバリ、「しょうがい」しゃーわが人生に悔いはなしー』解放出版
- ・八木晃介（1982）「戦後の障害者政策と障害者解放運動」全国障害者解放運動連絡会議編『障害者解放運動の現在ー自立と共生の新たな世界ー』現代書館
- ・山下幸子（2004）「健常者として障害者介護に関わるということー1970年代障害者解放運動における健全者運動の思想を中心にー」『淑徳大学社会学部研究紀要』第38号
- ・山下幸子（2005）「障害者と健常者、その関係性をめぐる模索ー1970年代の障害者／健全者運動の軌跡からー」障害学会『障害学研究1』明石書店
- ・横田弘（1974）『炎群ー障害者殺しの思想』しのめ発行
- ・横田弘（1975a）『ころび草ー脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊』自立社
- ・横田弘（1975b）『あし舟の声ー胎児チェックに反対する「青い芝」神奈川連合会の闘い』「青い芝」神奈川連合会
- ・横田弘（1979）『障害者殺しの思想』JCA出版
- ・横田弘（1985）『海の鳴る日』しのめ発行所
- ・横田弘（2004）『否定されるいのちからの問いー脳性マヒ者として生きて 横田対談集』現代書館
- ・横塚晃一（1975）『母よ！殺すな』すずさわ書店
- ・横塚晃一（1984）『母よ！殺すな（増補版）』すずさわ書店

インタビューした人達

- ・2005年6月24日：森修（1977～85年まで大阪青い芝の会会長）
- ・2005年7月27日：松井義孝（大阪青い芝の会初代副会長、1985年～88年まで会長）
- ・2005年8月30日：細井清和（1974年からゴリラとして活動、1984年から障大連（＝障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議）事務局で活動）
- ・2005年9月9日：河野秀忠（障害者問題総合誌『そよ風のように街に出よう』の編集長）

The Origin of Independent Living Movement for Disabled people in Osaka and Hyogo

SADATO Kuniko

Abstract:

In 1970 a mother killed her disabled child in Yokohama city. Her neighbors started a movement for a petition for mitigating her crime, because she was a victim of poverty of social welfare in Japan. However disabled people in the Kanagawa Green Grass Association protested against the movement for the petition from disabled people's point of view. Since then they have struggled with issues such as murder by family members of children born with disabilities, opposition to isolate disabled people in institutions, and provision of barrier free transport and living facilities. They tried to change the social values centered on people without disabilities.

The movement of Green Grass Association spread to the whole country. Why did the movement spread nationally in 1970's? I tried to show the reason by the case study of Osaka and Hyogo. In Kansai the movement started from showing film "Good-by CP" in 1972, and especially the idea of the Green Grass Association had a great impact on young disabled people. In 1973 they established the Osaka Green Grass Association, and then the Associations were established in Hyogo, Nara, and Wakayama. And more the movement developed into independent living movement for disabled people.

Key words : The severely disabled, Independent living movement, The Green Grass Association, Film "Good-by CP"